

第21回 厚木看護専門学校 教育課程編成委員会 議事録

日時：2026年3月12日(木)

16:25～17:10

場所：厚木看護専門学校 会議室

1 外部委員出席者（6人）

- (1) 高野 秀雄（厚木医師会長）
- (2) 北野 義和（厚木病院協会 副会長）
- (3) 和田 幸子（神奈川県看護協会県央支部副支部長）
- (4) 下島 三千代（東名厚木病院看護部長）
- (5) 神保 京美（伊勢原協同病院 副院長兼看護部長）
- (6) 吉富 真由美（厚木市健康こどもみらい部こども家庭センター所長）

【欠席：宗方 泰司（神奈川県立厚木王子高等学校 校長）】

2 厚木看護専門学校教職員出席者（4人）

学校長 五十嵐一美【委員長】、

看護学科長 島田真由美、看護学科技幹 中原真弓、総務課長 茂木憲明

看護学科総括主査 高橋隆子【オブザーバー】、

看護学科総括主査 池田紀子【オブザーバー】

【欠席：副学校長 田原裕子（海外研修参加による）】

3 議題等

(1) 議題

- ① 2025年度 カリキュラム評価について
- ② 2025年度 卒業生の看護師教育の技術に関する到達度評価について
- ③ 遠隔授業の推進について

(2) (1)①、②、③の議題に関する質疑応答、意見交換

(3) 配付資料

- ① 2026年度入学生用 スクールガイダンス
- ② 2025年度 カリキュラム評価について
- ③ 2025年度 卒業生の看護師教育の技術に関する到達度評価について
- ④ 教育課程編成委員会名簿
- ⑤ 教育課程編成委員会規程
- ⑥ 座席表

4 内容等

【茂木課長】

配付資料の確認を行った。委員は全員出席し当委員会規程第5条第7項に基づき定足を満たしている。

【五十嵐学校長挨拶】

本日は、教育課程について当校の取組を評価いただく機会であると受け止めている。

以下、3点報告する。1点目は、入学試験についてである。国家試験は無事に終了し、受験者数は69名であった。合格発表は24日に予定している。教職員一同、良い報告を届けたいと願っているところである。

2点目は、ダブルスクール生についてである。第1期生がこのたび卒業を迎え、放送大学3年次に在籍しながら、3年間で修得すべき単位をすべて取得して卒業した。なお、放送大学については4年次課程が1年残っているが、当校としては卒業まで引き続き支援し、看護学士の取得に至るまで伴走していく考えである。加えて、第2期生として10名を超えるダブルスクール生が控えており、今後も学生が両課程で着実に単位を修得できるよう支援を継続していく方針である。

3点目は、海外医療研修についてである。本日、副学校長の田原は欠席しているが、昨日、ロサンゼルスでの海外医療研修に出発した。本研修は希望者を対象とした取組である。もともとは2020年度3月に第1回を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止を余儀なくされた。その後、感染症法上の位置づけが5類へ移行し、再開に向けた機運が高まったものの、為替の影響による費用増もあり、実施に踏み切れない状況が続いていた。しかし、準備を着実に積み重ねた結果、このたび実現に至ったものである。本研修の様子は、今後インスタグラムでも海外から発信される予定である。ぜひご覧いただきたいと考えている。

当校としては、学生に自らの未来を描かせ、自身の職業の可能性を広げてほしいと強く願っている。そのため、学生にとって真に価値がある取組については、今後も徹底して追求し、実行していく方針である。そして、その源泉となるのが教育課程である。本日は教育課程の評価をお願いする立場として、忌憚のないご意見をいただきたいと思う。どうぞよろしくお願いいたします。

【茂木総務課長】

外部委員紹介及び、当校教職員紹介を行った。

本日の議事進行については、委員会規程第5条に基づき、五十嵐学校長を委員長とし、委員長が会務を総理することとなっている。よろしくお願いいたします。

【五十嵐学校長】

次第に基づき進行する。議題は2点ある。まず議題①②の資料をまとめて説明し、質疑・検討にすすめる。

【中原技幹】

資料1に基づき、「議題① カリキュラムの評価」について説明した。

【島田看護学科長】

資料2に基づき「議題② 卒業生の看護実践能力評価結果」を説明した。

5 議題①「議題①カリキュラム評価」についての質疑応答

【下島委員】

1ページから2ページにかけての学年別の表3成績の結果(1年次)表4成績の結果(2年次)表5成績の結果(3年次)について質問する。学生のレディネスや履修科目の違いはあると思うが、全体を概観すると、3年次の評価は結構低いように見受けられる。考えられる要因を教えてください。

【中原技幹】

3年次の成績が低く見える要因としては、実習評価が成績に含まれていることが大きいと考えている。当校の実習評価では、「普通にできる」レベルをC評価として位置づけ

ているため、一定程度できているだけではA評価にはならない。「よくできた」と判断される場合にB評価、「素晴らしい」と評価される場合にA評価やS評価となる基準としている。このように、実習評価においては比較的厳格な基準を設けているため、3年次については実習評価の影響を受け、全体として成績が低く見える傾向があると捉えている。したがって、3年次の評価結果には実習評価の基準が反映されているものとする。

【島田看護学科長】

昨年度は、3年生の評価が高すぎるのではないかという課題認識があった。学生が一生懸命努力していることを評価するあまり、全体として高い点数を付ける傾向が見られたためである。そのため今年度は、学生に何が身に付いているのか、知識としてきちんと確立しているのかという点をより重視し、評価の視点を教員間で共有したうえで成績評価を行った。

その結果、昨年度よりも評価がやや厳しくなり、全体として低く表れている面があると認識している。

【下島委員】

1年生と2年生については、知識は身に付いているという評価であり、一方で、実践になるとなかなか難しさがあるという評価になるのか。

【島田看護学科長】

1年生は講義が多い。学内の看護科目については、国家試験の過去問題からなるべく出題するようにしている。そのため、過去問題をきちんとやれば、ある程度点数が取れる面があり、良い面も悪い面もあるが、その影響で点数が少し高くなっていると考えている。

【神保委員】

今伺った説明の中で、実習についてはA評価やS評価が少ないという点は理解できた。一方で、基礎分野の中でも5ページのキャリアデザインはA評価やS評価が少ないように見受けられる。この点については、何か理由や背景があるのか伺いたい。

【五十嵐学校長】

キャリアデザインは私が担当している科目である。この科目は、実習、授業、研究すべてを終えた後に位置づけられる授業であり、その総括としてレポート課題を課している。内容としては、レポートを書く力や、自分の考えを表現する力をみることを意図している。キャリアに関する難易度の高い文献を6項目ほど提示し、その中から興味のある文献を選び、読み取った内容を要約し、図にまとめた上で、自分の考えと関連付けて考察する課題としている。

その中で、十分に書ける学生はまだ少ないと感じている。そのため、すぐに評価を付けて終わりにするのではなく、私とのやり取りを通してレポートをブラッシュアップする機会を与えている。

ただ、ロジックをしっかり組み立てることや、文献をきちんと読み込んで正しく要約することについては、なお課題があり、A評価を付けられない学生がまだ多い。

そこで、最後には学生たちに何が不足しているのかをコメントして返却しており、こうした力は今後臨床に出てからも磨いてほしいということを伝えている。そのため、この科目については厳しい評価をしている。

【高野委員】

1ページから2ページにかけて、表3-1年次、表4-2年次、表5-3年次の「成績結果」について質問する。先ほどの説明では、学年ごとに基礎学力の素養に違いがあるとのこ

とだったが、3年次はD判定の割合が比較的低い一方で、2年次と比較するとS判定、A判定がかなり減っているように見受けられる。

この点については、学年ごとの基礎学力の違いなのか、あるいは2年次から3年次に進む中で学習内容が高度化し、理解が難しくなっているからなのか、どのように捉えているのか伺いたい。

また、1年次はB判定の割合が多いが、先ほど説明のあった入学時点での学習能力の状況が影響していると考えてよいのか、併せて伺いたい。

【島田看護学科長】

成績の低下傾向としては、2年生から3年生になる段階よりも、1年生から2年生になった段階で成績が落ちる傾向が見られている。GPAも測定しているが、2.0以下の学生が増える傾向があると捉えている。

その要因としては、2年次に専門的な学習が一気に増えることが大きいと考えている。講義数も増え、解剖生理学や病態生理学といった内容について、1年次で学んだことを積み重ねながら理解していく必要があるが、その積み重ねや知識のつながりがうまくいかない学生が、2年次には多く見られると感じている。

一方で、2年生から3年生にかけては、学んだ内容を実習で活用する段階に入るため、そこでの実習成績が影響していると考えている。実習では、S評価やA評価を取ることが難しい学生が増えることが、成績の表れ方につながっていると見ている。

また、学年の特徴という点では、現在の2年生については、今の3年生以上にしっかり育てていかなければならないという意識を持って指導に当たっている。

【高野委員】

1年次から2年次にかけて、生理学など専門性の高い科目が増えることは理解できた。eラーニングやオンデマンド教材の充実は、専門性の高い科目の学習に対して有効に機能するのではないかと考える。繰り返し学習ができる環境を整えることは、学習理解を深めるうえでも有効である。

6 議題②「卒業生の看護師教育の技術に関する到達度評価」についての質疑応答

【神保委員】

資料2、1ページの結果欄にある42番の「筋肉内注射13%」の結果について伺いたい。臨地実習においてとあるが、実際には、実習中に筋肉内注射を実施する機会はありませんかと思う。そうした中で13%実施できたというのは、どのような形で実施に至ったのかを伺いたい。酸素吸入は学生と一緒に実施できると思うが、筋肉内注射は事情が異なると思う。

【五十嵐学校長】

筋肉内注射は、臨床で実施が難しい場合は、「見学でも可」としている項目に入っている。そのため、自分で実施していなくても、見学したことによる実施として含まれている可能性がある。

【神保委員】

筋肉内注射については、臨床では学生が実施することは難しく、実施するとしてもモデル人形を用いる形になると考えている。御校にはモデル人形が十分に整備されているため、校内で実施したほうがよいと思う。

また、臨床の現場においても、現在は筋肉内注射そのものの機会が多くないと認識している。コロナワクチン接種の際には筋肉内注射が行われていたが、現在はその機会も

ほとんどなくなっている。そうした状況を踏まえ、この項目を達成すること自体が難しいと思い、確認したく質問した。

【五十嵐学校長】

今回の看護師国家試験でも酸素に関する問題が出たが、筋肉内注射の部位についても出題されていた。全国の正答率は6割である。

私たちの時代は、筋肉内注射といえば必修問題であり、当然に答えられるものという感覚があったが、今の学生は十分に答えられていない。その背景には、体験する機会がかなり少ないことが関係していると思う。

この点については、島田が2024年度と2025年度を比較したレーダーチャートを作成しているため、続けて説明する。

【島田看護学科長】

ブルーの線が2024年度、赤の線が2025年度であり、まず、単独で実施できる項目について比較したところ、全体的に大きく減少しており、単独でできる項目の体験が十分にできていないことが分かった。

また、指導のもとで実施できる項目についても、7ページの表を用いて2024年度と2025年度を比較したところ、同様に大きく減少している傾向が確認された。2024年度の卒業生と2025年度の3年生は同じカリキュラムで学んでおり、実習時間や到達目標に違いはなく、実習施設も大きくは変わっていない。そのような状況にもかかわらず体験が減っていることについて、かなり検討を重ねた。

その結果、受け持ち患者に自立度の高い方が多いという印象を持っている一方で、重症度が高く、学生が関与しにくい患者も増えているのではないかと感じている。そうした患者状況の変化により、学生が体験できる機会そのものが減っている可能性があるかと捉えている。

さらに、学生の特徴も一因と考えている。2024年度の学生は休憩時間をずらすなどして行動していたが、2025年度の3年生は皆同時に休憩を取る傾向が見られた。そのため、本来であれば配膳などの場面で患者と関わる機会があったにもかかわらず、そうした経験を十分にできなかった可能性がある。

こうしたことを踏まえ、学生が体験の機会を逃さないようにすること、また、経験しなければならぬ内容について教員側からより意識付けしていくことが必要であると考えている。その点については、昨日、教員間で振り返りを行った。

【高野委員】

これは自己評価として捉えてよいか。

主観的な要素も多少含まれている可能性があると考えている。

【島田看護学科長】

実習終了の都度、技術体験についてチェックを行い、その結果を集計している。したがって、先ほどの13%については、筋肉内注射は見学による体験を集計したものである。

【神保委員】

筋肉内注射の体験の部分を増やしていくことは難しいと考えている。

【島田看護学科長】

ただ、映像教育等により繰り返し見ることはできるため、そうした学習を促していくことは必要である。

【神保委員】

筋肉内注射については、自分たちが習った時と今とでは方法がかなり違っている。実

際、コロナ禍で師長が接種を担当することになり、全員で YouTube を見ながら学んだが、昔の方法とは全く異なっていた。医師からも、今はその方法ではないと言われ、注射時の手技や部位の考え方も変わっていることを実感した。

そのため、この分野は難しいと感じており、自分たちも学びながらブラッシュアップしていかなければ、正しいことを教えることはできないと考えている。

【下島委員】

1 ページの結果 「30：酸素吸入療法の実施」も 15%と低くなっていることについて質問する。当院は急性期で受け入れており、酸素を使用している患者は比較的多いように思う。数値が低い要因を伺いたい。こちらが学生に対し、十分な動機付けができていなかったと感じている。今後の参考として、受け入れ側として何ができるのか考えたい。

【池田総括主査】

学生の話を聞くと、重症度の高い患者の場合は酸素を切る場面があまりないとのことである。そのため、この項目は「指導のもとで実施できる」とされているものの、学生は見て確認することはできても、実際に流量を調整する場面はほとんどないとのことであった。この評価はあくまでも指導のもとでの実施に関する評価であり、指導を受けたかどうかという点も含まれている。そのため、学生は指導は受けていても、自分で実際に流量を調整していないためそのように評価したものと考えられる。

【下島委員】

毎年同様の項目が課題として挙がるのであれば、臨床指導者会議等の場で提案してもらえると、受け入れ側としてもマネジメントしやすくなると考えている。他校でも同様の取組をしていると思われるため、ぜひ発案してほしい。

【高野委員】

筋肉内注射については、病院や診療所で肺炎球菌ワクチン接種等をまとめて行う場面があると思われるため、そうした機会を見学にも活用することも考えられる。筋肉注射を行う機会がある場合には、病院と相談し、外来等で見学できるようにすることも一つの方法ではないか。

【五十嵐学校長】

貴重なご意見感謝申し上げます。

全国の技術到達度を見る機会があるが、当校はその中では比較的高い水準にあると認識している。全国的には、侵襲性の高い技術の実施については、どの看護学校もなかなか踏み込めないという課題を共有しており、その中では当校は比較的实施できているほうではないかと考えている。

7 その他 「遠隔授業の推進」について質疑応答

【島田看護学科長】

次年度からは、Smart Learning として、猛暑等の状況に応じて登校に依存せず、自宅など安全な環境で e ラーニング学習や遠隔授業に切り替えられる体制を推進していきたい。まずは e ラーニングを活用した講義を 2 科目開講する予定である。今後は ICT やデジタル技術をさらに活用し、オンライン・オンデマンドに加え、主体的な学びを支える e ラーニング環境の構築を一層進めていきたいと考えている。

今後、協力や相談をお願いする場合もあるため、よろしくお願ひしたい。

【五十嵐学校長】

厚生労働省では、現在、遠隔授業に関するガイドラインを作成している。その中では、

eラーニングが最も進んでいるのは助産師課程であり、次いで看護師課程、保健師課程の順である。また、厚生労働省の見解としては、授業の4分の3をeラーニングで実施することも可能とされている。実際にそこまで進めている学校はほとんどないが、今後の学習の在り方を見直す枠組みとして、今年6月に公表予定のガイドラインに則り、当校としても取組を進めていきたいと考えている。この件について、意見や質問があれば伺いたい。

【神保委員】

現時点で、遠隔授業をどの程度導入することを検討しているのか。

【五十嵐学校長】

現在、月に2日から3日程度はオンライン授業を実施している。日常的に活用しないと学生が操作や学習の進め方を忘れてしまうため、非常時や悪天候が予想される場合には積極的にオンライン授業へ切り替えている。あわせて、今年度からは対面授業の一部をオンデマンド化し、その前後を対面授業で補うことで学習を担保する取組も始めている。次年度はeラーニングを2科目から開始する予定であるが、今後は8科目から10科目程度まで広げられる可能性があると考えている。ただし、そのためには教員間の調整や学生の学習状況の見極めが必要であり、今後、段階的に拡大するのか、年間1科目から2科目ずつ慎重に進めるのかを含めて検討していく考えである。

【吉富委員】

看護師の技術の一つに、対人関係やコミュニケーションが非常に重要であると考えている。厚生労働省では授業の4分の3をeラーニングで実施することも可能とされているが、そのような状況で、対人関係やコミュニケーション技術をどのように担保し、磨いていくのかについて伺いたい。

【島田看護学科長】

対人関係やコミュニケーションについては、対面であっても課題があると認識している。実際、友人同士であっても本音を言いにくい場面が見られるため、現在は論理的思考を育て、認知をしっかりと形成することに力を入れている。具体的には、事実を確認すること、自分の思い込みだけで判断しないこと、自分自身をきちんと認識できるようにすることを、1年次から強化している。

また、オンライン学習についても、知識の詰め込み型にはせず、論理的思考を育てられる仕組みにしたいと考えている。あわせて、自主性や主体性を育てることがコミュニケーションにもつながると捉えており、自分が何を学びたいのかを明確にし、それを言葉にして伝えられる力を育てたいと考えている。そうした力が、将来的に看護を探究していく姿勢につながるようにしていきたい。来年度は、この点に関する勉強会の開催も計画している。人との関わりや折り合いをつける力は、看護において最も大切にすべき点であると考えている。

【吉富委員】

保健師を採用する中で、困難な場面を避けながら業務を進めてきた結果、周囲の職員とうまくコミュニケーションを取れない保健師が見受けられる。そのような場合、患者とのコミュニケーションにも影響することが懸念されるため、こうした課題に対してどのように取り組んでいけばよいか、参考となる考えがあれば共有してほしい。

【五十嵐学校長】

授業ではグループワークを積極的に取り入れている。学生が発言することを重視し、アクティブラーニングを進めているため、学生からはグループワークが多いとの声が出

るほどである。

また、正課外でも学生自治会が非常に積極的に活動しており、自分たちの学校をより良くしようという意識のもと、要望書の作成などにも主体的に取り組んでいる。こうした活動も一つの裏カリキュラムとして意義があると捉えている。コミュニケーション力を育てるためには、このように学生同士が集まり、相談し、協働する機会を多く設けていくことが重要であると考えている。

【高野委員】

その活動は、全学年が参加して行っているのか。

【五十嵐学校長】

基本的には、3年間のうちに全員が何らかの形で学生自治会活動に参画することとしている。また、当校の学生はボランティア活動にも比較的積極的に参加している。アルバイトを禁止していることも一因と考えられるが、例えば昨日も、厚木市の委託による自殺防止に関する駅前での啓発活動に学生が参加していた。このように、ボランティア活動を通じた他者との関わりにも、比較的積極的に取り組んでいると考えている。

以 上